

## 【コメント】

### 真鍋俊照 MANABE Shunshō

ティンズリーさん、ありがとうございます。大変興味深く拝聴いたしました。私の専門は密教美術史なのですが、その観点からいろいろコメントすることになると、むしろ広範のお話に及ぶかと思えます。出だしの、今映っている版画を大変面白く見ました。これを象徴的にまず出されて、外国人として、日本美術のイメージ感といいますか、そういうものから、文化の違いにおけるひとつの日本固有の、そういう「愛染明王」の形というものが、自分たちの文化の中で再イメージ化されるということの面白さと、またもう一つ異なる解釈がそこに出来上がっていくわけですから、文化の変容の怖さというものも感じます。しかしおっしゃるとおり、これはそれぞれ住む国が違うし、持っているイメージ、文化、そういうものの土壌が違うわけですから当然のことだと思います。逆に私は、物と形の宗教的なものをちょっと抜きにした、そういう受容や形態（かたち）のとらえかたに面白さを感じました。これを軸にして宗教の問題、政治の問題、経済的な問題、あらゆるものに当てはめていくと、その文化の諸相、今盛んに日本が世界の仲間入りをしてそこに入り込もうとしている、さまざまな外国文化への理解と融合、そういうところにも逆説的にさまざまな異質な問題が横たわっているということが、これを通して理解できるのではないかと思います。

さて今、日本における密教美術の研究の実態というか、状況を少しここでご紹介しておいたほうが、ティンズリー先生の考え方に多少お役に立つのではないかと思います。日本の密教美術というのは、もともと日本美術史の中で育まれたものには違いないのですが、かなり宗教的な色彩の濃いものが密教美術ということでもとらえられていました。もちろん、仏教美術の中の密教美術という意味です。しかし、日本美術史の中では、日本美術史が主流になっていた少なくとも昭和30年代ぐらい、そのころにはかなり特殊な美術研究の対象というように位置付けられていました。もちろん、日本では大村西崖先生あたりが「曼荼羅」というのを、初めて密教美術のジャンルの中で取り上げられて、ここに「曼荼羅」が象徴化されて「仏教美術の中にも密教美術という存在があるよ」ということを位置付けられたように思います。大正・昭和に入ってかなり早い時期にそういうことが言われました。

今日では、逆に在野の人が、つまり密教美術を研究する、仏教美術を考える方々以外の人たちが非常に密教そのものに興味を持ち、また、空海の考え方や思想、こういうものに関心を持ってまいりました。それは、密教の難解な非常に難しい経典や真言陀羅尼など密教のさまざまな教え、こういうものがかなり具体的になって、一般の人々の手の届くようなところに理解がゆきとどくようになり、翻訳などもなされ、現代語訳もされた。そういうところに起因すると思います。

そういう観点で見てみますと、今のティンズリー先生の発表はかなり専門的ではあるにもかかわらず大変興味深く、また面白く拝聴した次第です。このことは、午前中のルドビック先生の「弁財天」のお話にも共通するかと思えますけれども。つまり、仏教美術というのはそのいろいろな形が時代を経るに従ってイコノグラフィ（図像）として展開されます。展開される過程の中で、神というものが、密教の中で、密教美術の中でどのように神格化されるのかということは、ご発表のとおり神秘的な問題だし、非常に大きなテーマ設定を含んでいると思います。つまり思想は図像に反映する一面があると思います。

この「丹生明神」というのは、空海が高野山を開くにあたって、その際に一人の狩人に会う。その狩人は一匹の犬を連れている。その狩人が高野山を案内した。そして高野山が空海によって開かれる。こういうストーリーにもとづいた伝説があるわけです。その故事にのっとって「丹生明神」「高野明神」というのがおっしゃるとおり神格化され、形の上では衣冠束帯の姿形になる。そういう二つの丹生明神、高野明神は、同時に胎藏界、金剛界の曼荼羅のもう一つの姿である「大日如来」にあてはめられている。これも「両界曼荼羅」というものに神々が含まれるという考え方から、おそらく空海の発想の中にそれがあったと思います。そういうものがきちんと礼拝されるようになる。そういう経緯を見ていくと、その後に出てきました愛染明王が、この二つの画像、つまり高野明神、丹生明神を仲介するような、そういう位置付けの念持仏として登場してくるのです。

それからもう一つ、その上に、愛染明王に匹敵する位置付けに「お舍利」が出てきます。お舍利は同時に、あの上を見ると、龍がそれを取り囲む。この二つの画像のうち高野明神は実際には「狩場明神」そのものということです。それは、同時に「丹生明神」であるという。

それからもう一つ、「僧形八幡」右側です。これはどうも形の上では非常に空海の像に似ているのです。この辺が八幡神として許されるようになった。つまり、空海か僧形八幡かというような、類似のところが紙一重の形で造形化されているというのは、図像表現における南北朝時代の特徴なのです。

この愛染明王は結局、丹生、高野明神との対比の中で、つまりお釈迦さんのお舍利というものが仲介の尊格化の根拠になっているのです。おそらくそういうものは、鎌倉時代の末あたりから弘法大師信仰というのが盛んになって、高野明神、丹生明神の対比が、両界曼荼羅の胎藏界、金剛界というあてはめ方の中でかなりイメージ化してくるのです。さらにそれが神格化することになるのは、尊が神の力を借りないと図像化できない。そういうシステムが、弘法大師信仰の中で育まれていたのではないかと思います。その証明が、ティンズリーさんのお話の愛染明王であり「愛染明王」はイコール「舍利」なのです。

かなり入念なペーパーを事前に私は受け取っております。お送りいただきありがとうございます。それを読み込んでいまして、密教の儀式の中にも、この舍利に該当するものは、私は仏さんの図像を可能にしていく根拠は「三十二相」だろうと思うのです。つまり、仏さんの特徴です。眉間のところに「白毫」があったり、喉のところに「三道」があったり。つまり、お釈迦さんが仏身となって尊格化していく根拠です。32の特徴がある。80の優れた種好が体の中にあるという。これは先ほどと同じように、「声明」の中にも、そういう尊格化を助長する、同調する、そういう声明があるのです。つまり、私が言いたいことは、愛染明王という、非常に強烈な憤怒形のこういう形のものを真ん中に置くことによって、もう一つの念持仏の対比で出ていましたように、お舍利が出てきましたね。このお舍利というのは実はお釈迦さんのお舍利です。今、密教ではいろいろな儀式の中でこのお舍利を塔の中に安置して、それで壇上を荘厳するのです。なぜ置くかということ、お釈迦さんが仏になるということは当たり前なことなのだけれども、密教では、その仏になるということを強烈に着目して、そこにひとつの宗教性、秘密的な意味を植え付ける。それは儀式の中でも声明というかたちで証明されます。たとえば「舍利講式」の存在がそれです。その声明の中には、先ほどの単純な口で唱えるだけではなくて、江戸時代の初めにそういうかたちでできたと思うのですけれども、「雅楽」がそこに入ります。雅楽が入るということは、密教にとっては異例のことなのです。ただし天台声明では例があります。この三十二相の中では、唯一仏になることを神のそういう音を借りて、それで雅楽を付してたたえていくのです。一つの解釈の例。

これは三十二相の一つ一つを音に託して演じているところです。雅楽の奏者が左側におりまして、真ん中の導師がその三十二相の一つ一つ唱えていく。これは仮想ですけれども、そうすると空間に、仏、仏身の形がそこに想定されるようになっていく。これは実はいろいろなものに応用されます。一つは「愛染」だろうと思います。弘法大師、空海の場合は。実際に、この愛

染さんの画像を掛けることもあるわけです。その根拠が今日のお話を聞いてちょっと分かったのです。というよりも、ティンズリーさんのペーパーを見て、そういうつながりを、私には理解できたのです。

(映像)

はい、結構です。延々と三十二相を順番に唱えていって、そして最後に仏さんの仏身という形が出来上がるというところまでいくのです。こういうことを声明として可能にせしめた理由は、先ほどのティンズリーさんのスライドを見てつくづく思うのですが、弘法大師が高野明神、丹生明神というものを下に従えた三つの絵柄が描かれた画像がございましたね。これは弘法大師の「問答講」というように高野山では呼んでいるのです。

「問答講」の画像には情景が描かれています。この空間の上に、空に永遠の弘法大師と高野明神があります。あの青いところというのは畳なのです。その上で問答をしている儀式会場で「四社明神」をまつるのです。ここで儀式を行っている。まさに「大日如来」イコール「仏身」となるのですが、それは「仏陀」の体なのです。そして、「大日如来」になった身体なのです。こういうものを空間に生み出してゆくのです。一つ脇太鼓というのを叩いて、念を押すようにして「みんな、私の言うとおりに付きなさい」ということで、導師が三十二相を唱えるということなのです。この導師をしていたのは天台声明の片岡義道さんで、もう亡くなられたのですけれども、鎌倉時代の曲譜をかなり苦心してメロディーを再現していただいた。これも金沢文庫に置いてあります。

たまたま入念なペーパーを送っていただいたので、それを読んでいて、「問答講」の背景にある三十二相の存在というものが、特にこの愛染明王を軸にして、その愛染明王にかかわるものがお舍利であるつながりを考えてみた次第です。今までにない発表だったと拝聴いたしました。ありがとうございました。